

鈴木晶著『ニジンスキー：踊る神と呼ばれた男』

海野 敏

ワツラフ・ニジンスキー（1889-1950）の評伝として、現時点で「決定版」と呼ぶべき良書。精神分析思想史と舞踊史を専門とし、日本におけるバレエ史研究の第一人者で露仏独英語に堪能な著者が、30年以上にわたって資料を調べ続け、まとめ上げた記念碑的業績である。本書はA5判サイズの単行書で、前付と巻末索引を含めると422ページの労作であり、その持ちごたえする厚さに著者の情熱を感じずにはいられない。

言うまでもないが、ニジンスキーとは、20世紀初頭に彗星のごとく現れ、舞踊史に巨大な足跡を残しながらたちまち姿を隠した天才かつ伝説的ダンサーであり、革命的な振付家である。鈴木はすでに、雑誌連載をまとめた単行書『ニジンスキー神の道化』¹を1998年に著し、また同じ年に『ニジンスキーの手記：完全版』²を翻訳刊行している。本書は四半世紀を経て『ニジンスキー神の道化』を全面的に書き直したもので、若干の重複はあるが、大幅な加筆によってほぼ倍の長さの新たな著作となっている。

本稿では本書の特徴として、①評伝としての詳細さと正確さ、②研究書としての巻末註、参考文献リスト、巻末索引、図版の価値、③余談と傍註（欄外註）の魅力の3点に焦点を絞り、以下順番に論ずる。

著者は「はじめに」で次のように述べている。

ニジンスキーの約六十年にわたる生涯は、きれいに四期に区切られる——最初の十年は幼少期（旅芸人一家の次男として）、次の十年はバレエ学校の生徒、その次の十年はプロのダンサー（かつ振付家）、そして残りの三十年は精神病患者。（p.ii）

本書は、この60年間の生涯を7章構成で、とりわけ舞踊家としての側面に光を当てて描き出したものである。第1章が最初の10年、第2章が次の10年、第3～6章がダンサー・振付家としての活動期、そして第7章が残りの30年に相当する。

第1章「生い立ち」は、誕生から幼少期について。まず本章は、諸説あるニジンスキーの生年月日をめぐって、6ページを割いた丁寧な説明から始まっている。そして、妹プロニスラワの記載した「1889年2月28日（西暦3月12日）」を取り上げ、「私はこの日付を採用する。」（p.6）と宣言して、その根拠を披露している。また幼少期のエピソード

を並べて、「ワツラフはいわゆる多動児だった。」（p.21）、「彼は脳が身体器官に指令を送る前に器官が独自に動いてしまうようなタイプ、平たくいえば「身体的知性」の持ち主だったのではないか」（p.22）と述べ、天才の特異な気質について指摘をしている。

第2章「帝室バレエ学校」は、正式名「サンクトペテルブルク劇場学校バレエ科」の生徒として過ごした日々について。入学試験の様子、ニジンスキーを教えた教師たちの人となり、彼が生徒時代に出演した演目の情報なども興味深い。彼の私生活の記述が特に印象深い。なかでも抜群の技量を備えていながら「コミュ障」（p.68）で、級友たちから仲間外れにされていたニジンスキーが日常的に受けた陰湿ないじめは、初めて知る読者は衝撃を受けるであろう。彼は12歳のとき、級友による悪意ある悪戯で激しく転倒し、5日間意識が戻らず、2箇月間の入院をしている。

第3章「マリインスキー劇場」は、マリインスキー劇場バレエ団に入団して活躍し、セルゲイ・ディアギレフに出会うまでの2年弱の期間について。ここでは当時の同バレエ団を取り巻く状況や、ニジンスキーが出演した13のバレエ演目について詳しく述べられている。さらにニジンスキーのセクシャリティに関しては、最初のパトロンとなったリヴォフ公爵との関係、娼婦を買って淋病にかかった体験、そしてパトロンがリヴォフ公爵からディアギレフへと交替した経緯などを、資料に基づいてつまびらかに解き明かしている。

第4章「パリへ、世界へ」は、ディアギレフが主宰する巡業バレエ団、いわゆるバレエ・リュスにおけるダンサーとしての活動について。著者は全7章のうち、本章に最も紙幅を費やした。例えば、バレエ・リュス第1回公演（1919年5月）については、演目選定の経緯から金銭的な契約の事情まで記述が行き届いている。また、ニジンスキーが出演した『シェエラザード』、『火の鳥』、『カルナヴァル』、『薔薇の精』などの演目については、その創作の背景、作品の成り立ち、当時の観客や評論家の反応、さらに作品の精神分析的な解釈までを、1作ずつ克明に論じている。

第5章「振付家ニジンスキー」は、バレエ・リュスにおける振付家としての活動について。本章で論じているのは、『牧神の午後』、『春の祭典』、『遊戯』の3作品で、それぞれについて子細な歴史的事実が列挙されるのみでなく、著者独自の解釈が

加わえられており、読みごたえがある。とりわけ『牧神の午後』については31ページが割かれており、ロダンの手紙、チャップリンの映画、フレディー・マーキュリーのミュージック・ビデオなどを参照しての関連な筆運びは実に見事だ。

第6章「転落」は、ニジンスキーがディアギレフに内緒でロモラ・プルスキーと結婚し、ディアギレフを離れて活動をした時期について。ニジンスキーの最後の振付作品『ティル・オイレンシュビーゲル』の詳細や、トルストイ主義の彼への影響についても論じられている。そして第7章「闇の中へ」は、次第に精神を病み、数十年を経て亡くなるまで。本文の最終ページ（p.382）には、著者が撮影したニジンスキーの墓の写真が掲載されている。

本書の第2の特徴は、巻末註、参考文献リスト、巻末索引、図版が充実しており、それらが研究書としての価値を高めている点である。

本文中には引用・参照箇所章ごとの通し番号が付されており、巻末の「註」（pp.383-393）および「主要参考文献」（pp.394-400）で情報源が確認できる。この巻末註は374個あり、本文全体を通しては疎密はあるが、1ページあたり平均1.0個の註が付されている。また、「主要参考文献」には、ロシア語の文献11点を含めて108点が並んでおり、主題ごとに分類したうえで外国語文献と日本語文献に分け、それぞれ著者名のアルファベット順と五十音順に配列されている。

巻末索引は、「人名索引」8ページと「バレエ作品索引」2ページの2種類が用意されている。前者には姓名の五十音順に490人、後者には作品名の五十音順に120作品が並んでいる。これを眺めるだけでも面白い。例えば「人名索引」を見ると、バリシニコフは4箇所、薄井憲二は5箇所、ショパンは6箇所、それぞれ本文中に登場していることが分かる。

図版が多いことも本書の特徴である。肖像写真、集合写真、衣装を着たダンサーの写真、舞台写真と舞台のスケッチ、美術・衣装のデザイン画、楽譜と舞踊譜、ニジンスキーの直筆原稿と彼が描いた絵に至るまで、各章の扉写真を含めて105枚の図版が掲載されている。本書に含まれている多種多様な情報が、舞踊史研究者にとって貴重な資源であることは間違いない。

そして本書の第3の特徴は、数多くちりばめられた余談と傍註によって、学術的な専門書でありながらたいへん読みやすく、優れた文芸書として評価できる点である。

本書は、おおまかにはニジンスキーの人生を時系列にたどる記述となっているが、それぞれの節項を読み進めると、時間は頻繁に前後して話題が別な方向に進み、意外なところへ広がってゆく。

次々と関連するエピソードを繰り出して読者を惹きつける著者の博覧強記には恐れ入るばかりである。また、話が脱線したようにみせかけて、実は本質的な指摘をして読者をうならせる仕掛けが見事だ。この点については、文芸評論家の三浦雅士が次のように評しており、同意見である。

傑作評伝。小説より面白い。（中略）著者の自在な文章がほとんど名人の域に達している。「ちなみに」「余談だが」で始まる一節がかなりの頻度で登場するが、余談どころかその多くが状況を大きく俯瞰して理解を助ける。³

また、巻末註以外に奇数ページの欄外に付された傍註も見逃せない。この傍註は本文に147個付されており、例えば第3章だけで30個、第4章だけで28個もある。これらは学術書の補足情報としても、文芸書としての面白さの点でも読み落とすべきではない。

例を挙げるならば、「アラベスク」、「アッサンブレ」、「ブリゼ・ヴォレ」などのバレエ用語の説明や、ボリス・コフノ、グリウス・ミヨー、ケネス・マクミランなど、その箇所にしか登場しない人物の解説が傍註となっている。また、語学に堪能な著者らしく、「原音により忠実に表記するならば、マリウス・プティパであるが、慣例に従ってマリウス・プティパと表記する。」（p.35）とか、チャルダージュについて「チャルダージュと表記されることが多いが、それは間違い。」（p.147）のように、日本語表記の問題を傍註で指摘している。

冒頭に述べた通り、本書はニジンスキー評伝の決定版であり、彼のダンサーとしての側面、振付家としての才能、その孤独な性格と精神構造、性愛にまつわる詳細なエピソードまで、あらゆる側面から書き尽くされている。しかも、読み進めることで、19世紀以降のバレエ史、舞踊史が見通せるように書かれている手腕も評価できよう。ニジンスキーの存在を単なる歴史の特異点、孤立した存在としてではなく、大きな歴史の流れの中でもがきつづけ、舞踊史のターニングポイントでひときわまぶしい輝きを放った人物として描いているのだ。

なお、本書は2024年2月に第75回読売文学賞で「研究・翻訳賞」を受賞、10月に第34回吉田秀和賞を受賞したことを付記する。

- 1 鈴木晶『ニジンスキー神の道化』新書館、1998.7.
- 2 Nijinsky, Vaslaw『ニジンスキーの手記：完全版』新書館、1998.7.
- 3 三浦雅士「『ニジンスキー 踊る神と呼ばれた男』＝鈴木晶・著」『毎日新聞』東京朝刊、2023.9.9. p.11.

（みすず書房、2023年7月刊行）